

五塚山古墳

— 発掘調査概報 —



五塚山古墳・遠景（空中撮め写真）

1999

静岡県小笠郡大東町教育委員会

文化財係

例 言

1. この書は、静岡県小笠郡大東町大坂7163-3に所在する「五塙山古墳（いつづかやまこふん）」の発掘調査に関する調査概報である。
2. 調査実施原因は大東町文化会館建設に関連する展望台建設工事で、事前の記録保存を目的として調査を開始した。
3. 当該古墳は平成6年度において、建設工事に先立つ遺跡有無の試掘調査で発見された。
4. 本調査は平成9年1月から数回に亘る中断を経て、最終的に平成10年8月に終了した。
5. 調査は静岡県教育委員会文化課の指導を得ながら、大東町教育委員会が主体となって実施した。
6. 本概報の編集についても、大東町教育委員会が実施した。
7. 調査によって得られた資料及び出土遺物は、すべて大東町教育委員会が保管している。
8. 本書はあくまでも概報であり、正式な本報告は今後刊行される発掘調査報告書を参照されたい。

目 次

1. はじめに (1)
2. 調査について (2)
3. 遺物について (3)
4. おわりに (5)



五塙山古墳・遠景（東方から）

1. はじめに

黒潮寄せる遠州灘に面した大東町は気候温暖で、古くから人々が住んでいたと考えられる。その痕跡として町内に数々の遺跡が確認されており、中でも古墳時代の遺跡が多い。しかし、その多くは「横穴群」と呼ばれるもので、主に佐東・中地区に集中している。そして、大坂地区などには円墳や前方後円墳で知られる高塚式の「古墳」が分布している。今までに大東町教育委員会でも数々の発掘調査を実施しているが、そのほとんどが横穴群であり、今回の「五塚山古墳」は高塚式の古墳としては初めての調査である。

さて、古墳とは地域の有力者が埋葬されたお墓である。死とはいつの時代でも恐怖である。人々は死を恐れ、そして再生することを願っていたのかも知れない。また、有力者は死後においてもその威儀を示すために大きな古墳を築いたのだろうか。そして、古墳の上では、死者を黄泉の国へ送るための様々な祭祀が行なわれたと考えられる。しかし、そうした有力者以外の一般の人々は古墳から見下ろされる地域に住み、田畠を耕し、様々な重圧に耐えていたのである。そうした人々がいるからこそ、その上に古墳を造ることの出来る者が君臨できるのである。こうした背景の中で五塚山古墳が築かれたのだろうか。

五塚山古墳がある地点は三方に視界をさえぎるもののがまったく無く、その眺望は素晴らしい。釜田や新川や川久保に古墳時代のムラの堅穴式住居などがあれば、それらを見下ろすには絶好の場所であり、はるか遠州灘の波間までも見渡すことができる。

では、この古墳に埋葬された人とは一体、どんな人だったのだろうか。検出された遺構や出土した遺物を紹介して、古墳時代のこの地域の様子を推測してみよう。



五塚山古墳・位置図

2. 調査について

五塚山古墳の調査で、3つの遺構（埋葬部分）が検出した。その中でも最も大きく中心的な位置を占めている遺構を、第1主体部と呼んで調査を実施した。この第1主体部は隅丸方形に堅穴状の細長い掘り込みを掘り、その底には棺を安定させるためにびっしりと礫を敷きつめている。そして棺を安置して、掘った部分と棺の隙間を礫で埋めている。埋葬に際しては、まず棺の中に遺体を収め、そして副葬品として様々な物を入れる。それは通常、その人が使用していた物や身に付けていた物である。さらに、須恵器という古墳時代の土器に、お供え物などを入れたと考えられる。そして棺にふたをして、さらにその上にも礫で覆って埋めたのではないだろうか。その後に盛土をしてこんもりとした古墳の墳丘を形づくり古墳を完成させたのであろう。

こうした埋葬部分の形態を「礫椁」と呼んでいる。通常、古墳の埋葬部分には横穴式石室や木棺直葬など時代ごとにいくつかの形式があるが、「礫椁」という埋葬形態は非常に珍しいものと言える。

この礫椁の規模は、北側掘り方から礫の南側隅までの残存長で4.92m、最大幅2.47m、深さは最大で約70cmである。



第1主体部・塚上面突出状況



第1主体部・礫椁出状況（作業進行中）



第1主体部・櫛敷状況（白線に棺の推定位置）

その礫椁の主軸に平行して、すぐ隣約25cmに寄り添うように小さな堅穴状の遺構が検出された。これを第2主体部と呼ぶ。これは、礫椁とは逆って礫で覆われているということはなかったが、底面には礫が整然と敷かれていた。また、形状も長楕円形で、大きさも全長2.55m、最大幅1.30m、深さは最大で約55cmと非常に小さく、大人が埋葬されたとは考え難いものである。さらに出土した遺物も直刀1振のみである。こうした状況から、礫椁に埋葬された人の子供の遺構か、あるいは単なる宝物を埋葬するための遺構なのか、現在の段階では検討中であり、想像の域を出ない。



第2主体部

次に第3主体部として、環濠の北側隅に主軸の方向が違う埋葬施設と思われる遺構が検出された。規模は全長3.80m、幅1.30m、深さは最大で約46cmである。ここも同様に長楕円形に掘り込んでいるが、ここでは底面は土のままで棺を置き、棺と乗り込みの間には漆を詰めている。さらに、棺の上には土を被せたようである。出土した遺物は鉄製の鎌と直刀のみである。また、この第3主体部の長辺側の1部が、第1主体部の環濠と切り合っていることで、その古墳(第3主体部)を壊して環濠(第1主体部)を構築していると考えられる。つまり、ここには、環濠が構築される以前に、既に古墳が存在していたことが分かった。また、墳丘については比較的大型の円墳ではないかと思われたが、調査前の丘陵の形状から大規模な方墳の様相も十分受けられた。そこで、トレンチによる調査を実施して、その規模及び形状を確認した。その結果、この古墳の形状は円墳で、規模も径が約20mの予想より小さい古墳であることが分かった。さらに、墳丘はやせ尾根上に築造されているが、地山を削り出している部分と盛土をしている部分があることから、第3主体部が構築された当初の姿とその後の第1・第2主体部が造られた形とは変化していることも考えられる。



五塚山古墳・近景(空中真上写真)



第3主体部

3. 遺物について

古墳からは、そこに埋葬された人に関わる様々な遺物が出土する。特に、当時使用された須恵器(すえき)という土器は、主に祭祀に使われたと考えられており、古墳からは良く出土する。これは、古墳の築造年代を示す目安とされ、その大きさや形状からその土器の作られた時期を判断し、築造年代を決定する。また、その他に被葬者が使っていた物や身に付けていた物などが出土し、その人の権力の大きさや当時の技術の高さなどが解明されるとともに、当時の風俗習慣や生活様式など様々なことが推定される。五塚山古墳からは以下の遺物が出土した。

有蓋台付四連壺(ゆうがいだいつきよんれんつき)

環濠(第1主体部)から出土した。4つの壺が台の上で1つに連なった器種で、蓋を伴う。壺は、蓋受を有して口縁部は直立し、全体の形状はやや箱形を呈する。口径は9.2~9.8cmを計り、全体の高さは18.2cmを計る。台部は二段透かし入りで、ラバ状に開き、鋤状工具による波状文を上下二段に施す。台部の径は11.1cm、接合部までの高さ12.2cmを計る。蓋は2点のみの出土で、いずれも口縁部が垂直に垂下し口縁部と体部の境に稜を持ち、全体の形状は箱形を呈し、つまみを有する。口径は10.4~11.0cm、高さ5.3~5.5cmを計る。



有蓋台付四連壺

台付三連聴(だいつきさんれんはそう)

蝶柳(第1主体部)から出土した。3つの聴が台の上で1つに繋がった器種である。聴は頸部から口縁部はラッパ状に開く。体部には平行な二条の沈線を巡らせて、穿孔を有する。また、胴部には櫛状工具による刺突文が、頸部には櫛状工具による波状文が施されている。口径は9.3~10.0cm、高さは約9.0cm、胴部幅約8.6cm、全体の高さ16.0cmを計る。台部は一段透かし入りでラッパ状に開き、櫛状工具による波状文を上下二段に施す。台部の径は9.3cm、接合部までの高さ約6.5cmを計る。これは、1度に作られたのではなく、それぞれに1つの台と3つの聴を別々に作った後、粘土紐により4つを接合して、聴の体部に新たな穿孔を施している。したがって、接合して見えなくなってしまう部分にも、きれいに施されされていた。



台付三連聴

青銅鏡

蝶柳(第1主体部)から出土した、青銅製の鏡である。文様には、鳥のような意匠が5羽見られることから鳥文鏡と思われるが、獸とも見られることから獸形鏡の可能性も考えられる。サビの進行が甚だしく、今後のクリーニングなどの保存処理とともに、さらなる精査が必要である。径は13.8cmである。



青銅鏡



第一主体部出土鉄製品(上:鐵矛、下:鐵劍)



垂飾金具

剣と矛

蝶柳(第1主体部)から出土した、鉄製の剣と矛である。剣は長さ57.8cm、幅3.3cm、厚さ0.7cmを計る。矛は長さ35.8cm、幅2.7cm、厚さ1.8cmを計る。

垂飾金具

蝶柳(第1主体部)から出土した。金製の飾り金具の一部と思われ、長さ1.1cm、幅8mmで中空である。完形でなく製品の一部のためその全容は不明だが、類似的なもので垂飾付耳飾ではないかとも考えられる。

玉類

蝶櫛(第1主体部)から多くの玉類が出土した。これらは、首飾りや腕飾りなどとして使われたと思われる。出土した総数量は181点で、内訳は管玉が11点、丸玉が26点、小玉が144点である。

直刀

第2主体部と第3主体部から、それぞれ鉄製の直刀が出土した。現在、土やサビを落とすためのクリーニング中に計測値は概数であるが、第2主体部の直刀は残存長81cm、幅5cmである。また、第3主体部の直刀の残存長は94cm、幅4cmである。

鉄鎌

第3主体部から鉄製のやじりが出土した。これも同様に、計測値はすべて概数であるが、約20~30本程あると思われ、長さも概ね12~13cm程である。



玉類(管玉・丸玉・小玉)

*注 撮影のため一部を隠したもので、この様に出土したものでもなく、当時この様に使用されていたものでもない。

4. おわりに

このように、今回の発掘調査によって様々な遺構や遺物を発見した。これらの資料から五塙山古墳が造られた頃を考えてみたい。

まず、出土した須恵器であるが、有蓋台付四連环と台付三連環などは静岡県内でもあまり類例がない、特異な形をした器種である。このような須恵器は、尾張地方でよく造られているようであり、尾張から持ち込まれたものと考えられる。しかし、遺物を良く観察すると地元の遺物と胎土が非常に似ているところもあり、あるいは技術が流入し地元で焼かれた可能性も十分に考えられる。いずれにしても、県内では恐らく初めての出土と考えられ、その形状から5世紀末頃のものと思われる。また、その他に青銅製の鏡や鉄劍・鉄矛が、そして勾玉こそないが大量の玉類が出土している。さらに、現段階では不確定だが、垂飾付耳飾の一部ではないかと思われる飾り金具も出土している。

次に、遺構についても、棺の上も蝶で覆っている完全な蝶櫛という、極めて類例の少ない遺構が検出した。これは、周辺遺跡でもあまり見られない工法を用いていることから、在来ではなく外來からの支配者と考えるむきもあるが、もう一方では、手近にあった小笠山藤岩層の河原石を使って経費を節約したのではないかとの意見もあり、もう少し検証したい。さらに、すぐ隣に寄り添って検出した、非常に小規模の第2主体部は直刀一振のみの出土であり、あるいはその子供と一緒に埋葬されたのであろうか。

こうしたことから、ここに埋葬された者は、剣を差し、ネックレスのように首飾りを巻き、金の飾りを身につけていたことであろうか。そしてその者は、強大な権力を持ち、尾張との交流を図りながら新川・釜田・川久保周辺を支配していた、この地域の首長であり、地方豪族だったのかも知れない。そして埋葬に際しては、鏡に呪術的な思いを込め、土器にお供え物を載せて葬られたのではないだろうか。

尚、垂飾付耳飾は県内では報告例を聞かないが、福井県天神山7号墳や三重県などで出土事例がある。福井例と直ちに同類のものとは言えないが、同種のものと考えて良さそうである。今後の検証を待っていただきたい。

今回は、町内初の高塙式の古墳の発掘調査であった。こうした調査で、得られた資料の積み重ねと今後の研究により、当地域の古代の様相がさらに解明されるであろうことを期待したい。



五塚山古墳・中景(空中写真)

編集・発行

大東町教育委員会 社会教育課 文化係

〒437-1491 静岡県小笠郡大東町三俣620

☎ 0537-72-1121